

第6回 和歌山県弥生・古墳時代研究会の報告

開催日時：平成24年10月28日（日）9:30～11:00

開催場所：和歌山県立紀伊風土記の丘（和歌山市岩橋1411番地）

研究会の発表内容：

「和歌山県の石庖丁について」 仲原知之（紀伊風土記の丘）

弥生時代の稲穂を摘み取る道具である石庖丁について、使い方や作り方、形態や石材などの基礎的な内容を解説しました。石庖丁は、右利き用に作られたものが多い中、左利き用に作られたものが少数存在し、個人の手に合った作り方をしており、個人的な持ち物であったと考えています。

次に、和歌山県内における石庖丁について、紀北では結晶片岩、紀中・紀南の一部では頁岩（スレート）を使用していることを、岡村遺跡（海南市）や立野遺跡（すさみ町）などの実物の石庖丁を観察しながら紹介しました。県内の各集落では近郊の河原などから石庖丁に近い形の石材を採集して、集落ごとに製作している状況をわかっています。和泉地域や大和地域でも石庖丁の製作途中品が見つっていますが、現在のところそれらの地域へ搬出するような大規模に製作する集落は県内では見つかっていません。紀伊地域で出土する石庖丁の素材は石庖丁形の河原石が多いですが、和泉地域の池上・曾根遺跡などではあまり水で磨かれていない大形の石材も出土しており、海岸などの崖で採集したものを船で運んだ可能性も考えられます。

参加者：（敬称略）

<発表者> 仲原知之（紀伊風土記の丘）

<参加者> 高橋克壽（花園大学）、渡邊拓也（花園大学）、安藤拓（花園大学）、後藤広美（花園大学）、

（以下風土記の丘ボランティア）金森昌子、津田明子、木村健

<発表者1名＋7名 計8名>

【参加者のコメント・質疑応答】

<和歌山県の石庖丁について>

- 金森 : 石庖丁の穴に紐を通す方法と使い方はどうやってましたか。
- 仲原 : 石庖丁には紐で擦れた痕跡が残っており、紐のかけ方がわかります。表面では横方向、裏面では上方向に紐の痕跡があり、紐を取り付けた後、中指を紐に通して、親指と石庖丁で稲穂をはさんで手首を返すように回転させて摘み取ります。紐穴は通常2つですが、兵庫県の明石川流域や高知県などでは1つ穴の石庖丁があります。岡山県ではサヌカイト製、徳島県では結晶片岩製の両端に抉りを入れて紐をかけた打製石庖丁もみられます。いずれも使用方法はほぼ同じで、紐をかけて指を通せば使えたと考えられます。
- 高橋 : 民俗例では収穫は女性がおこなう例が多くありますが、石庖丁は女性用ですか。
- 仲原 : 石庖丁は利き手や手の大きさなどに合った個人のものとして作られています。女性用であったか男性用であったかどうかを証明することはできていません。小さいものは女性用であった可能性もありますが、石庖丁は使用と再研磨を繰り返して小さくなっていくものなので、証明する手立てにはなりません。
- 高橋 : 石庖丁はどの時代まで残りますか。
- 仲原 : 近畿の石庖丁は弥生時代後期の前半まで残り、後半にはほとんど姿を消します。後期前半でも石庖丁の残存状況が見えているだけ、石庖丁を実際に使っていなかったかもしれません。
- 高橋 : 石庖丁でなくなったら何で収穫していましたか。
- 仲原 : 近畿の中でも石庖丁の石材が採取できず石材産出地から遠い河内や大和地域では木庖丁（木製穂摘具）を使用するようになります。木庖丁の後に古墳時代前期には鉄製の手鎌（摘鎌）が使われます。それが次第に鉄鎌に置き換わっていきます。石庖丁の鉄器化は石斧から鉄斧への鉄器化に比べて遅れます。それは木を切り出したり、削ったりすることに比べて、稲穂を摘み取る作業は鉄の有効性が低かったことに起因します。石や木でも簡単に稲穂を摘み取ることができるからです。
- 津田 : 木庖丁はいつから使われていますか。
- 仲原 : 木庖丁には2種類あって、石庖丁形のもの、内部に割り込みを入れて石や鉄を装着するタイプのものがあります。石庖丁形のは石材が入手しにくい地域での石庖丁の代用と考えられ、播磨地域の玉津田中遺跡や河内地域の鬼虎川遺跡では弥生時代中期に出現しています。鉄などを差し込むタイプも玉津田中遺跡などでやや遅れて出現します。

両者とも石庖丁の代用であったかもしれませんが、その背景には鉄器化が進んでいる地域であることが推測できます。鉄製品を使用して薄く木材を加工して木庖丁を簡単に作り出すことができることが背景にあると思います。石材を入手しにくい地域の方が木庖丁化・鉄器化が進むと考えられ、紀伊地域では石庖丁が遅くまで残っていた可能性があります。